

2025 年 Wasabi Global Cloud Storage Index

日本版 エグゼクティブ サマリー レポート

Wasabi と Vanson Bourne による共同調査



日本における主な調査結果の概要



クラウドストレージ市場には手数料に関する課題が存在

- ユーザー支出のほぼ半分 (**49%**) はストレージ容量ではなく、手数料に集中しています。
- 予算超過は依然として課題となっています。調査対象企業の**63%**が、2024年におけるクラウドストレージへの予算額を超過したと回答しました。
- **65%**が、下り転送料金やその他のAPIアクセスにかかる費用が原因で、IT業務または事業上の取り組みに遅れや支障が生じていると示しています。



ストレージの意思決定者は依然としてクラウド データ セキュリティを重視

- ストレージ導入を決定する意思決定者は、プロバイダーを選択する際に最も考慮すべき項目として、ネイティブなデータ保護、セキュリティ、コンプライアンス機能を1位に挙げています。
- 優先されるセキュリティ機能では、「暗号化」、「データの耐久性と可用性SLA」、「ランサムウェアやマルウェアからのリカバリー」が上位を占めています。
- 一方、今年の分析では、重大なギャップが明らかになりました。現在オブジェクトロックを使用している組織はわずか**46%**ですが、今後12ヶ月間に導入する予定がある企業は多数 (**51%**) に上ります。



企業はオブジェクトストレージをより有効に活用しようとしている

- オブジェクトストレージ容量のうち、「コールド」(アクセス頻度が年1回またはそれ以下で、パフォーマンスやアクセスに制限があると予想される容量)に分類されるのは**19%**に過ぎません。
- 生成AIのような新たなユースケースに加え、バックアップなどのセカンダリストレージのユースケースも利用率の増加を促進しています。日本の調査回答者の**66%**は、パブリッククラウドストレージ環境から少なくとも毎月データをリカバリしていると回答しています。毎日データをリカバリしていると答えたのはわずか**3%**となりました。



クラウドオブジェクトサービスが「アクティブ」なアーカイブのための費用対効果の高いストレージを実現

- 企業はアーカイブデータの価値と利用可能性を見直しています。多くの企業は、低コストのディープアーカイブ層に保存されたデータにアクセスすることはないと考えていますが、実際には、大半の企業 (**69%**) が、少なくとも毎月こうしたデータにアクセスしています。
- 日本におけるアーカイブデータへのアクセスを促進する理由の第1位は、ランサムウェアやマルウェアなどのセキュリティ事象です。
- **14%**の企業が、コールドストレージ層のパフォーマンスやデータアクセスの遅延により、業務に悪影響が出たことがあると回答しました。

2025年Global Cloud Storage Index

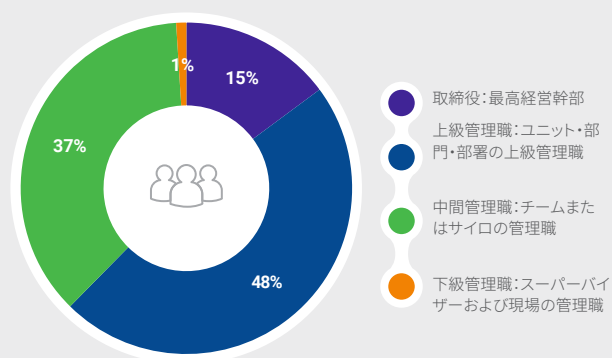
2024年後半、Wasabiはクラウドストレージ市場の動向と傾向をより深く理解するために一次調査を依頼しました。このエグゼクティブサマリーでは、日本における調査結果の概要を示すとともに、IT分野の意思決定者が注目し、自社のクラウドストレージ戦略に活かすべきポイントを解説します。

Wasabi Cloud Storage Indexは、2025年で3年連続となります。本年度は、調査会社Vanson Bourne社が世界中のIT意思決定者1,600名を対象とした調査を実施し、**日本での調査対象者は200名でした**。調査対象者は、各企業のクラウドストレージの購入プロセスに携わっていることを条件に選定されました。質問内容は多岐にわたり、クラウドストレージの購入に関する企業の嗜好、ベンダーの満足度、予算や利用における主な課題、課金区分と様々な料金体系の影響、データセキュリティとコンプライアンスへの期待、アクティブアーカイブのユースケースにおけるクラウドオブジェクトストレージの活用方法など、様々なトピックがカバーされています。

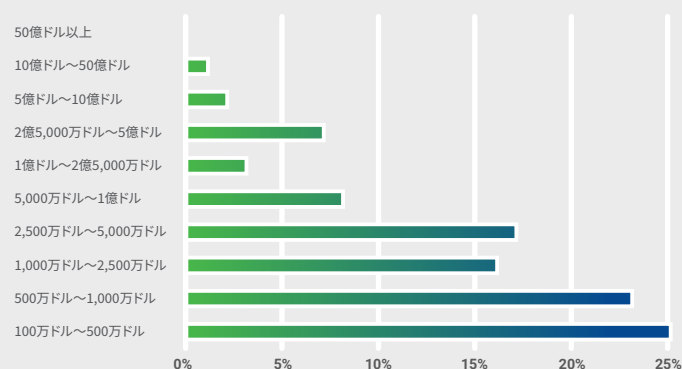
弊社の調査データは、パブリッククラウドストレージ市場全体を反映するように設計されており、IT意思決定者に戦略的イニシアチブの指針となる信頼性の高いデータポイントを提供し、市場ダイナミクスに対する理解を深めていただくことを目的としています。

注：この調査はWasabiのユーザーを対象としたものではありません。

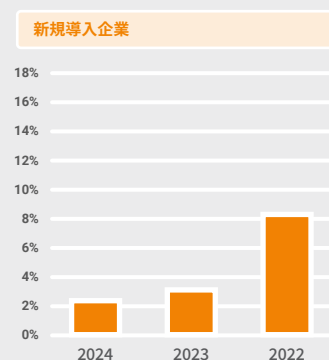
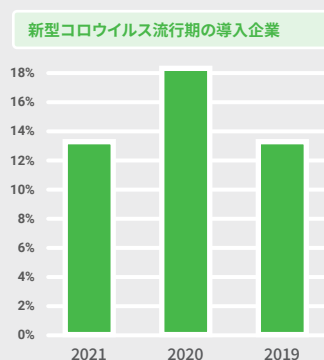
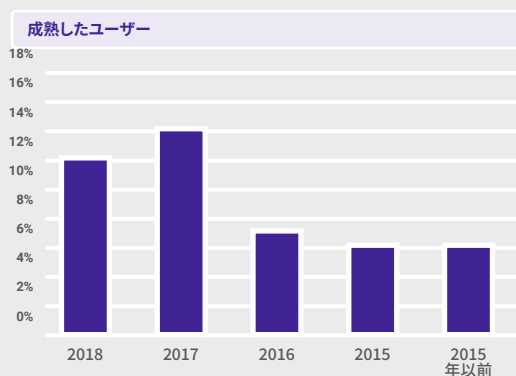
ご勤務先でのご自身の役職に最も近いものをお答えください。



貴社の世界規模のIT予算をお答えください。



貴社が最初にパブリッククラウドのオブジェクトストレージを導入したのはいつでしたか。





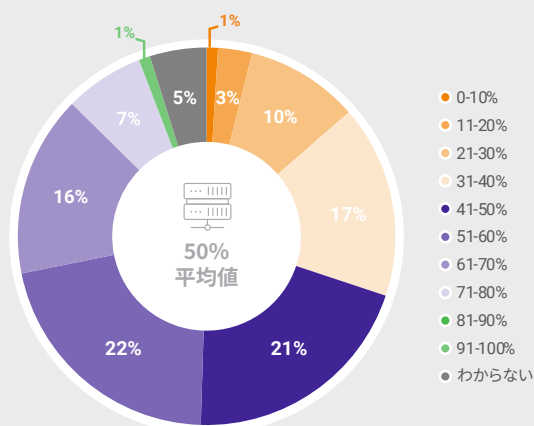
クラウドストレージ市場には手数料に関する課題が存在する

平均すると、日本の企業はクラウドストレージの請求額のほぼ半分以上を、ストレージ容量ではなく手数料に充てています。

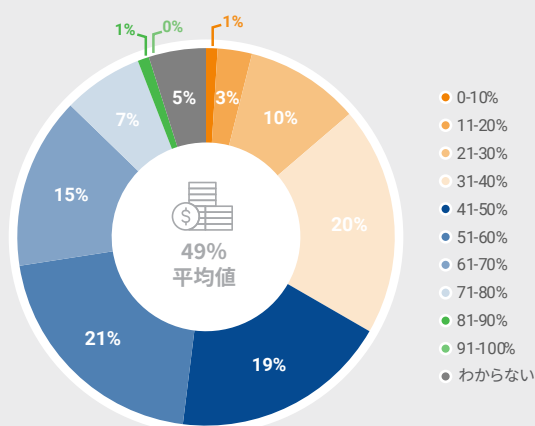
クラウドストレージサービスを利用する企業が負担する手数料の割合が高いことが、3年連続で調査結果から明らかになりました。

正確には、回答者は平均して請求額の**49%**を手数料に、**50%**を実際のストレージ容量に充てていることを示しています。

貴社のパブリッククラウドストレージのサブスクリプションや請求総額のうち、およそ何%が次の分野に割り当てられていますか：
ストレージ容量

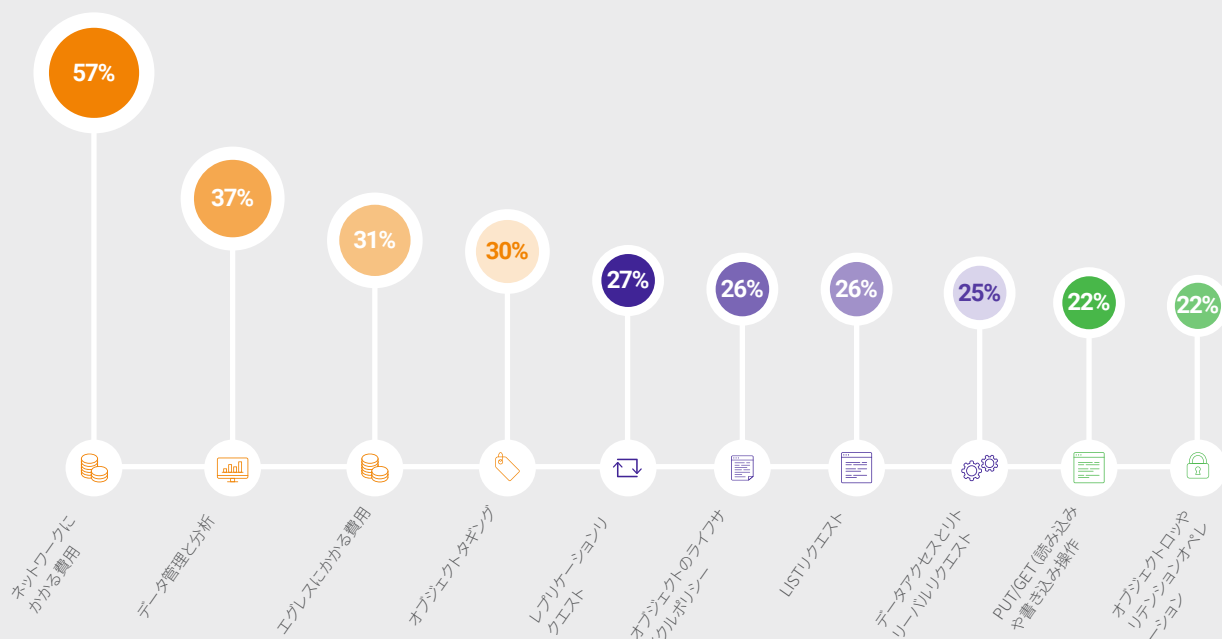


貴社のパブリッククラウドストレージのサブスクリプションや請求総額のうち、およそ何%が次の分野に割り当てられていますか：
ストレージ手数料



この手数料とは、具体的にどのようなものでしょうか。主要なクラウドストレージプロバイダーの大半は、その環境に保存されたデータに対して、様々な利用やアクセスに関する手数料を請求しています。エグレスなどのネットワークにかかる費用や、読み込み、書き込み、リストのAPIベースのデータ運用に関する手数料は、その中でも特に認知度の高いものです。しかし多くの場合、こうした手数料は氷山の一角に過ぎず、データ検索、オブジェクトロック、オブジェクトタギング、オブジェクトライフサイクル、レプリケーションリクエストなど、それほど一般的に知られていない手数料が毎月の請求額に大きな影響を及ぼしています。

貴社のクラウドストレージの請求額に最も寄与していると思われる機能またはオペレーションをお答えください。

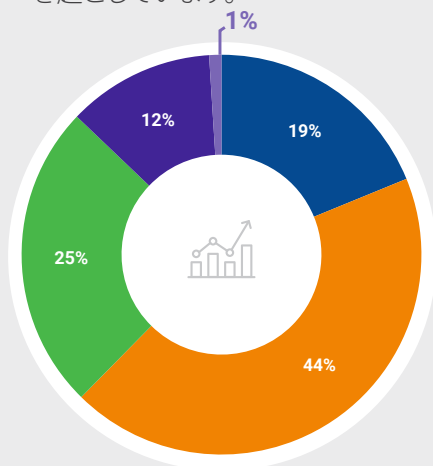




手数料はIT業務や事業上の取り組みに支障をもたらし、予算超過を招いてユーザー満足度の低下につながる

複雑な料金体系がもたらす短期的・長期的な悪影響

日本の大手ハイパースケーラーが採用しているクラウドストレージの料金体系は、3つの大きな問題を引き起こしています。

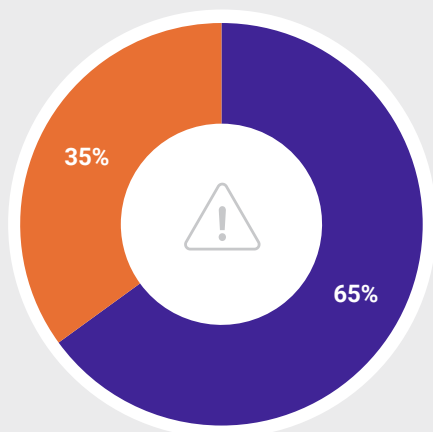


1. 予算超過:

調査対象企業の**63%**が、昨年度のクラウドストレージへの支出が予算を上回ったと回答しています。残念ながら、この数字は昨年の割合(**55%**が予算超過)よりも悪化しています。

過去1年間で、貴社のパブリッククラウドストレージに対する貴社の実際の支出額は、予算の見込みとどのように一致しましたか。

- パブリッククラウドストレージへの支出は予算を大幅に超過した
- パブリッククラウドストレージへの支出は予算をわずかに超過した
- パブリッククラウドストレージへの支出は見込みと一致していた
- パブリッククラウドストレージへの支出は予算をわずかに下回った
- パブリッククラウドストレージへの支出は予算を大幅に下回った

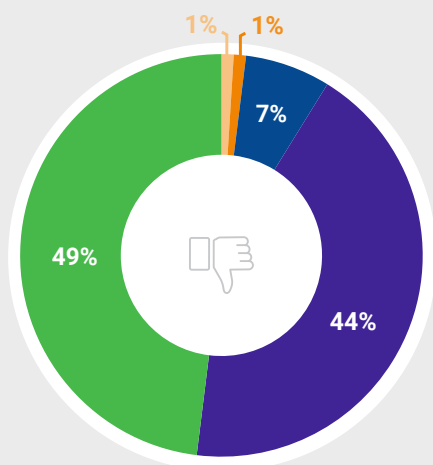


2. IT業務や事業上の障壁:

回答者のおよそ3分の2(**65%**)が、パブリッククラウド環境からデータを移行する際に発生する下り転送料金やその他のデータアクセスにかかる費用が、自社のIT業務や事業上の取り組みに遅延や支障を生じさせていると回答しています。

パブリッククラウド環境から貴社のデータを移行する際に発生する下り転送料金やその他のデータアクセスにかかる費用によって、貴社のIT業務や業務上の取り組みに遅延や支障が生じましたか。

- はい
- いいえ



3. ユーザーの不満:

ユーザーの満足度に関する質問では、回答者の大多数(**92%**)が利用しているクラウドオブジェクトストレージサービスに満足していると答えています。

貴社でご利用の全てのパブリッククラウドのオブジェクトストレージサービスに対する総合的な満足度をお答えください。

- 非常に満足
- 満足
- どちらでもない
- 不満
- 非常に不満

ただし、一部の回答者が完全に満足していない理由を掘り下げてみると、価格設定(課金と料金体系の複雑さや価格の値上げを含む)やデータのバックアップや保護に関する懸念が不満の理由の第1位に挙げられています。

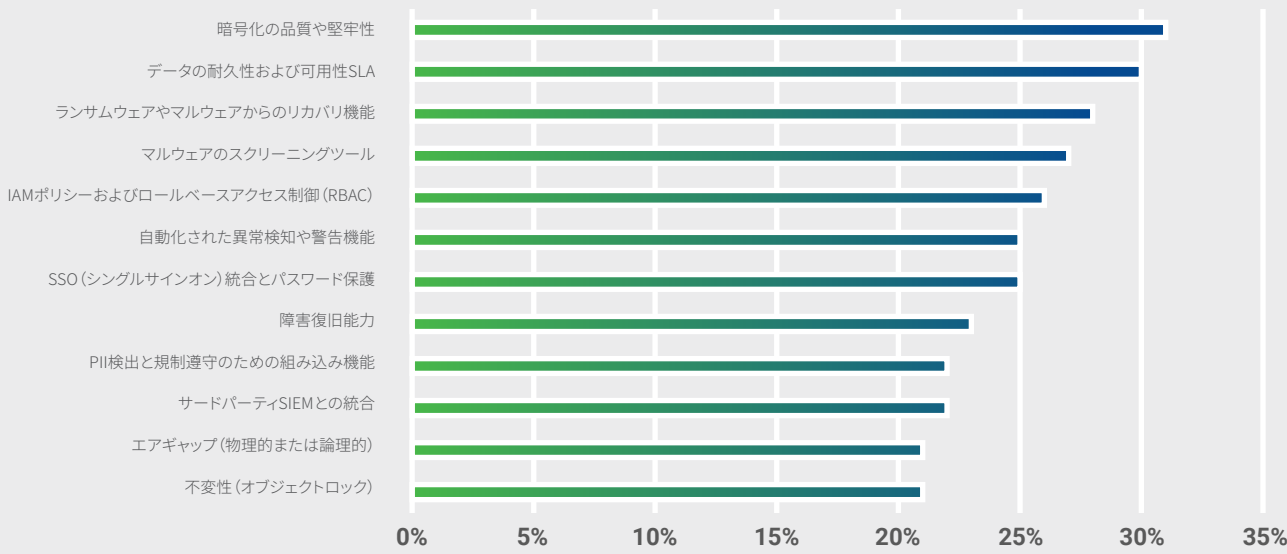


ストレージの意思決定者は依然としてクラウドデータセキュリティを重視している

しかし、オブジェクトロックなどのネイティブセキュリティ機能の活用が不十分な企業が多い

調査結果によると、日本のクラウドストレージの意思決定者は、特に基本的なセキュリティに重視していることがわかりました。購入者が利用するサービスプロバイダーに求める最も重要なデータセキュリティ機能として、「暗号化の品質や堅牢性」、「データの耐久性や可用性SLA」、「ランサムウェアやマルウェアからのリカバリ機能」が上位に挙げられています。

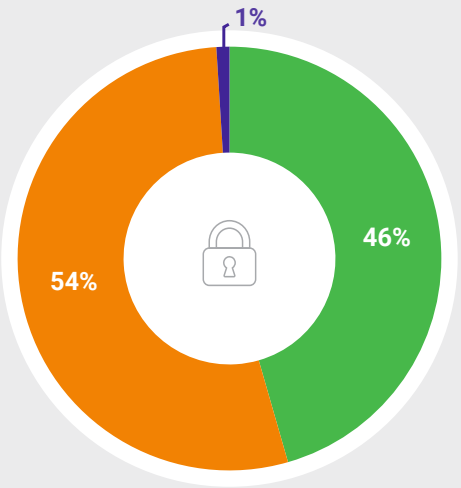
クラウドストレージプロバイダーまたはサービスを選択する際に、貴社がプロバイダーやサービスに求める最も重要なデータセキュリティ機能をお答えください。



興味深いことに、回答者全員 (100%) が、パブリッククラウドストレージの利用が企業にデータセキュリティ関連のメリットをもたらしていると考えていると回答しています。回答者が挙げたセキュリティ上のメリットのトップは次の通りです。

1. 突発的なデータ損失の防止と軽減が容易になること
2. フェイルオーバーとワークロードをクラウドに移行できること

一方、クラウドデータセキュリティ戦略の重要な要素である多くの企業が認識している「不変性」のためのオブジェクトロックの利用について具体的に聞いたところ、現在、実際に利用している企業は全体の半数以下 (46%) にとどまりました。



オブジェクトロックの利用率がそれほど低いのはなぜでしょうか。明確な理由は定かではありませんが、弊社では、オブジェクトロックのポリシー設定や維持に関連する費用と手数料が関係しているのではないかと推測しています。

貴社は現在、パブリッククラウドストレージのバックアップの標準操作手順の一部として、不変性 (オブジェクトロック) を使用していますか。

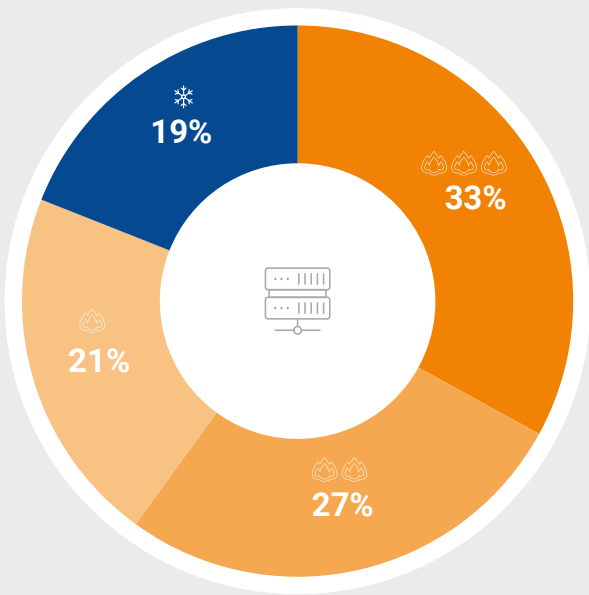
- オブジェクトロックがある
- 導入予定
- 導入予定なし



企業はオブジェクトストレージをより有効に活用しようとしている

クラウドのバックアップコピーにアクセスする必要はないとお考えですか。もう一度考えてみてください。

日本におけるクラウド オブジェクト ストレージの容量の約半分 (容量ベースで**48%**) は、過度にホットでも過度にコールドでもない領域 に位置しています。オブジェクトストレージがこれほど幅広いエンタープライズアプリケーションやワークロードに対応できる理由の1つとして、この理想的な特性が挙げられます。



貴社でお使いのクラウド オブジェクトストレージの容量のうち、下記のカテゴリーに該当する容量の割合はどのくらいですか。

- 「スーパー」ホット**
(ビジネスアプリケーション、コンテンツ配信、ファイル共有、データベースなどのプライマリストレージ。アプリケーションやワークロードのパフォーマンスには、極めて高速なアクセスと読み取りや書き込み時間が要求される)
- ホット**
(アクセス頻度の低いビジネスアプリケーション用プライマリストレージで、日/週ごとのアクセスあり)
- ウォーム**
(バックアップとリカバリまたは「アクティブ」アーカイブのユースケース用セカンダリストレージ。パフォーマンス要件はほとんどなく、月/四半期ごとのデータアクセスあり)
- コールド**
(年単位またはそれ以下の頻度でアクセスがあるアーカイブデータ用セカンダリストレージで、アクセス性能に制限があることが予想されるもの)

興味深いことに、オブジェクトストレージ容量のうち、「コールド」と分類されたものはわずか**19%**でした。これは、クラウド オブジェクト ストレージ市場全体の方向性を示す重要な指標になると思われます。クラウドに配置されるのは、長期的で非アクティブなアーカイブデータだけではありません。企業は一貫して、データを「より有効に活用しよう」としています。

しかし、データを「より有効に活用する」といっても、その解釈は多岐にわたります。バックアップを例に考えてみましょう。今年、調査回答者の**66%**が、パブリッククラウドストレージ環境から少なくとも毎月データをリカバリしていると回答しました(ただし、これは世界平均の**85%**を大幅に下回っています)。さらに、毎日データをリカバリしていると答えたのは**3%**となりました。この背景には、RTO(目標復旧時間)/RPO(目標復旧時点)に関するより詳細な要件が影響しています。また、これに加えて、バックアップコピーのテストや更新を定期的に行うという要求や要件が高まっており、アクセスがますます増えているのです。最近では、生成AIのような新しい分野での開発やテスト要件でバックアップコピーの利用が増加していることも、セカンダリストレージへのアクセスを増加させている要因となっています。

貴社では、テストを含むバックアップやデータリカバリの目的で、パブリッククラウドストレージ環境からどの程度の頻度でデータをリカバリしていますか。





クラウド オブジェクト サービスが「アクティブ」なアーカイブのための費用対効果の高いストレージを実現

保存された大量のデータを長期にわたって保持し、アクセスする必要性の高まりにより、ストレージの「アーカイブ」に対する期待が再定義されることが予測される

今年のCloud Storage Indexで日本の回答者全員が、アーカイブ関連のユースケースにクラウドストレージを使用していると回答しています。分析およびデータ処理、プライマリストレージの拡張（コスト目的、パフォーマンスニーズなど）、セキュリティ分析とフォレンジック（高度な脅威の検出やハンティングなど）、コラボレーションアプリケーション（Eメール、メッセージング、エンタープライズソーシャルメディアなど）、規制およびコンプライアンス要件が、「アクティブ」アーカイブのユースケースのトップを占めています。

良い点は、クラウド オブジェクト ストレージは、様々なアクティブ アーカイブ ユースケースに対応する費用対効果が高く、パフォーマンスの高いソリューションとして活用できるということです。一方で、多くの「コールド」オブジェクト層では、長期的かつ安価に保持することを目的としたデータに触れることで、パフォーマンスやアクセス上のペナルティが発生するという問題があります。こうした問題はエンドユーザーにどのような影響を与えるのでしょうか。残念ながら、回答者の**99%**は、コールドストレージ層に保持されたデータに触れることに伴うパフォーマンス低下やデータアクセスのペナルティに対処しなければならないという結果が出ています。また、このような問題は頻繁に発生しており、少なくとも毎月アーカイブデータにアクセスしている回答者は**69%**に上ります。

貴社では、パフォーマンス低下やアクセスペナルティが課されるクラウド層から、クール／コールドデータにアクセスしたり、データを取得したりする必要がどの程度の頻度でありますか。



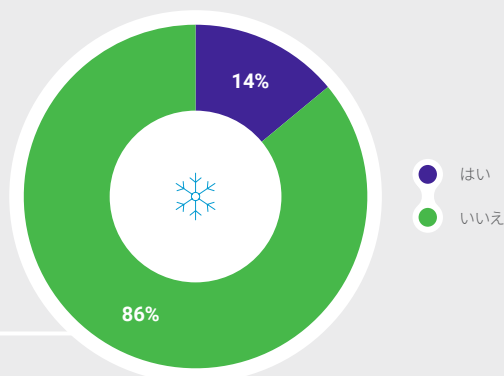
今年の分析で明らかになった別の重要な相違点は、このアーカイブデータアクセスの多くが、エンドユーザーや企業の直接的なコントロールの及ばない要件や影響要因によって引き起こされているということです。コールドデータをリハイドレート／アクセスする主な理由について聞くと、回答者は次のように答えました。

- セキュリティ事象（ランサムウェアやマルウェアなど）
- 規制および法令遵守の必要性

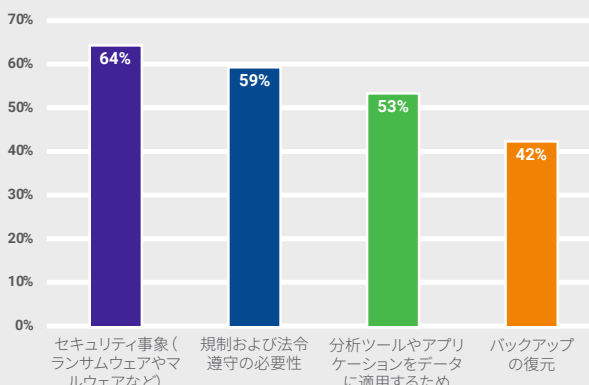
つまり、アーカイブデータへのアクセスは、必ずしも計画的で既知の活動の結果とは限らないのです。

利用量とアクセスが増加し続けるにつれ、パフォーマンスの遅延や手数料に関連する課題も増加しています。今日では、コールドストレージ層のパフォーマンスやアクセスの遅延によって業務に悪影響が出たことがある企業は**14%**に上ります。

コールドストレージ層のパフォーマンスやデータアクセスの遅延により、貴社の業務に悪影響が出たことはありますか。



貴社がコールドデータをリハイドレート／アクセスした主な理由をお答えください。



- 「株主からの反発を招きました。」 - 日本の回答者
- 「データアクセスの遅延により、開発作業が一時的に停止しました。」 - 日本の回答者

調査方法

調査の詳細

Wasabiは、独立系の市場調査会社であるVanson Bourne社に、クラウドストレージに関する一次市場調査を委託しました。調査は、計1,600名のIT関係の意思決定者を対象に実施しました。そのうち200名は日本国内の意思決定者であり、企業でパブリッククラウドストレージの購入に、何らかの関与や責任を負っている方々を対象としています。調査は、2024年11月～12月、公共機関や民間企業を問わず、従業員数が100人以上の企業を対象としました。調査は目的に沿って、適切な回答者を対象とするよう、厳格なマルチレベルスクリーニングプロセスを経て行われました。

Vanson Bourne社について

Vanson Bourne社は、テクノロジー業界の市場調査における独立系スペシャリストです。同社の堅牢で信頼性の高いリサーチベースの分析は高く評価されています。その土台となっているのは厳格なリサーチ原則、そして様々なビジネスセクターおよび主要市場における技術・経営部門の上級意思決定者の意見に耳を傾ける能力です。詳しくは www.vansonbourne.com をご覧ください。

Wasabi のお問い合わせ先

japansales@wasabi.com

sales@wasabi.com

press@wasabi.com

